



TITLE:

畫架座新星の近況

AUTHOR(S):

CITATION:

畫架座新星の近況. 天界 1928, 8(87): 279-280

ISSUE DATE:

1928-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161302>

RIGHT:

起し、月が中天に懸かる間此現象續くも、月が傾けば水は段々冷却して濃厚なり、最初の位置に戻らんとして流れが生ずるに依りて居る。マグナツソン氏は氷州の上古史より潮汐の説を採擷したが、至極滑稽の事がある。新月の時は月は地球から太陽に至る道の丁度上にあるから、海が干るのを許さないで其濕氣を地球に投ずるから新月には海水が膨起して所謂大潮を生ずるものだ、しかし太陽が通り越せば再び太陽は其熱を海上に送り、そのため海の膨起を減ず、又月が太陽に反する位置にあれば何者も太陽の輻射を遮らないから、海水は非常に熱せられて盛んに膨脹すること、丁度釜の水が沸騰するに似たること同様だといふて居る。一體太陽の輻射熱が月に遮られて大潮を起し、又熱の過剰によりて海水が膨起して大潮を起すといふことは、元來辻褄の合はない話だ。潮汐に關し上古の奇怪論を條條しく云ふ必要はないが、一千七百二十二年にバルロー氏は潮汐の精査を題する一書を著したが、其説に曰く、潮汐は元來地球雰圍氣に及ぼす月の壓力に外ならないといふた。此説は稍納得の出来るもので、二十年間其壽命が續いた。(理學界第五卷より)

畫架座新星の近況

1925年五月二十五日 Watson 氏の發見した Nova Pictoris (「天界」第55號第290頁、及び第56號第335頁英文欄)は、發見以來種々興味ある現象を見せたが、其の漸次光輝は衰へて行つた。ところが、最近、此の星について三つのニュースが傳へられて來た。即ち

(1) 本年二月二十七日附のハーバード速報はがき第55號に、南米 Laplata 天文臺長 J. Hartmann 氏からの電報が載つてゐるが、其れは

“Nova Pictoris diameter one second”(畫架座新星は直徑1秒あり)

といふのであつて、之れは他の今までの新星にもあつた通り、此の星が可なり著しい遊星形星雲に變形しつつあるものらしい。

(2) ハーバード天文臺から本年三月一日附で發行された BULLETIN 第856に、Bloemfontein 出張所長 J. S. Paraskevopoulos 氏は此の星が明ら

かに輪形星雲で包まれてゐる事を報告してゐる。觀測は昨1927年九月二十二日、十月二十七日、同三十日、十一月十七日、同二十五日、同二十六日に「10吋」Metcalf 望遠鏡で撮影したものである。尤も此の如き星雲狀のものが此の星の周圍にあるらしいといふことは、Paraskevopoulos 氏が未だ Arequipa 出張所にゐる頃即ち1926年十月に疑ひを持ち始めたものであるといふ。

- (3) 去る三月二十九日、全國の日刊新聞は南阿 Johannesburg 天文臺よりの電報として「Nova Pictoris が二つに裂け、壯觀を呈してゐる」といふニュースを載せた。最近、Copenhagen より送られた天文同盟回報第197號には、Yeoville 天文臺から

“Finsen observed Nova Pictoris to be double star”

といふ電報を載せてゐる。此の電文のままでは、少々了解し兼ねる程奇抜な意味であるし、又、此のニュースの根據である Finsen といふ人は南阿ユニオン天文臺の臺員であるから、此の種の觀測には經驗のある人であらうが、詳報が来るまでは眞意が判明しない。しかし、上記の事狀を考へ合せて見るに此の星の周圍の星雲が更に異常な發展を遂げて、遂に二重星に見える程になつたのだらう。

いづれにしても、不思議な新星にはいかにも有りさうな事件として、面白い事である。讀者の中には先日の新聞電報を見て、驚かれた人も多からうと思ふ。此等のニュースは益々確かに「新星はプロミネンスの如き天體雰圍氣の珍現象なり」といふ自分の持論を裏書きするやうに見えて愉快である。

此の面白い畫架座新星が、緯度の都合上、我が日本の内地から見えない南方の天にあるのは残念なところである。しかし臺灣まで行けば見える。尤も今直ぐは駄目であつて、毎年十月(早曉)から翌年三月(夕暮)までの間、南の地平線上、Canopus 星の南 10° 、又、畫架座 α 星の右下隣に見える筈である。自分等は此の星の近況を聞く毎に、中口径の望遠鏡を持つて今直ぐにも臺灣の土地へ飛んで行きたいやうな氣がする。(山本)